

仏弟子アーナンダの呼称 Vedehamuni について

田村 典子

I. はじめに

仏弟子の一人であるアーナンダ (Ānanda 阿難陀, 阿難) の Vedehamuni という呼称には、「賢者」と「ヴィデーハ国の牟尼」という二通りの解釈がある。永崎[1991]¹は、これらの解釈を次のように検証している。すなわち、前者については、ブッダゴサによるパーリ註釈文献の註釈書の記述にもとづいて、この場合 Vedehamuni の Vedeha は普通名詞として扱われている。後者の解釈は、アーナンダが仏教の出家具足前にヴィデーハ (ヴェーデーハ) 国に行って無語戒の修行を行ったという仏伝文献の中に、特に *Mahāvastu*, 『仏本行集経』の記述に根拠があり²、この場合には Vedehamuni の Vedeha を固有名詞と解釈している。しかし、実際にはパーリ仏教文献の校訂者や翻訳者の多くが、むしろ後者の解釈を採用している³。

このように、アーナンダの呼称 Vedehamuni を巡る解釈の由来は明らかにされたが、未だ Vedehamuni に関して十分に議論されていない点も残っている。そこで本論では、永崎[1991]が明らかにしたことを踏まえた上で、未だ不明であるうちの次の二点を明らかにすることを目的として置き考察していくことにする。まず第一点として、パーリ仏教文献の校訂者や翻訳者の多くが「ヴィデーハ国の牟尼」の解釈を採用しているということだが、パーリの註釈書の記述にもかかわらず、パーリ仏教文献において、このように Vedehamuni の Vedeha を固有名詞と解釈することは妥当であろうか。第二点として、Vedehamuni の Vedeha を固有名詞と解釈することを妥当とするならば、その場合の Vedehamuni は何を意味するだろうか。第一、第二点共に、Vedehamuni の解釈に「賢者」のみを伝承しているパーリ仏教文献およびパーリ註釈文献を主に研究対象として、Vedehamuni の扱いを改めて検討し、Vedeha という語句が如何なる意味を含むのか検討することを通じて Vedehamuni の意味を考察していく。考察の際には、永崎[1991]が Vedeha 国について、なお疑問として提示している点⁴にも着目していくが、仏弟子アーナンダに対する Vedehamuni の Vedeha を固有名詞⁵と解することで、Vedehamuni の持つ別なる側面が見いだせるかと考えられる。

II. Vedehamuni と呼ばれる背景

まず、アーナンダに対して Vedehamuni が用いられる背景について触れておきたい。

アーナンダが Vedehamuni と呼ばれるのは、数少ない場面においてであり、Thullanandā, Thullatissā といった比丘尼による場合などである⁶。 *Saṃyuttanikāya*(以下 SN)に対応する南伝大蔵経の中で、訳者の林五邦氏は、この Vedehamuni を「・提訶の聖者なる尊者阿難」と

訳した上で「第二の釋尊として尼衆に尊ばれし嘉稱」と註記している⁷。広く知られているように、比丘尼たちから信頼の篤い⁸アーナンダであったことが、尼衆より *Vedehamuni* と呼ばれる由縁であると考えられる。

しかしまた、一方で、アーナンダが、女人の出家を得せしめたことは、釋尊の入滅後、マハーカッサパ(*Mahākassapa* 大迦葉)により呵責される一つの項目ともなった⁹。この一連のマハーカッサパによるアーナンダへの呵責の記述は、両者の関係を示す資料の一つであるが、アーナンダに対して *Vedehamuni* という呼称が用いられる幾つかの場面には、マハーカッサパの存在が関連していることも注目される。永崎[1991]¹⁰は、この点について *Vedehamuni* という呼称をアーナンダとマハーカッサパという仏弟子の関係と関連して示唆している。

Ⅲ. パーリ仏教文献におけるアーナンダに関する記述

ここでは、アーナンダが経典や註釈文献の中で、どのように表現されているのかを見ておく。

アーナンダは、広く知られているように、二十五年間ブッダと行動を共にした唯一人の仏弟子であり、多聞第一、隨侍第一の仏弟子¹¹と述べられ、ブッダからも経典中で「第一人者」¹²と称せられている。またパーリの註釈書¹³に見られるように「多聞の中の第一人者」として彼の出身である釈迦族から期待を得ていたことも伝えられている。*Theragāthā* (以下 *Therag*) G. 1018-1050 に述べられるアーナンダは、「学識あり、ブッダの侍者であるゴータマ」「ブッダが教えを説かれている時、私に智慧が生じた」というように、智慧と関連しても述べられている。アーナンダは、デーヴァダッタ¹⁴とは兄弟関係であり¹⁵、ゴータマ・ブッダとは従兄弟関係にあったとされることから、*Therag* に見られるようにアーナンダも「ゴータマ」¹⁶と呼ばれ、その姓もゴータマであったろうと言われている¹⁷。

また、同じ仏弟子のマハーカッサパとは、性格やその修行方法が異なることも指摘されている¹⁸。マハーカッサパ¹⁹が頭陀行第一と称せられる²⁰のは知られている通りである。

Ⅳ. パーリ註釈文献における *vedehamuni*

パーリ註釈文献では、冒頭でも述べたように *vedehamuni*²¹に対して「賢者」という語義解釈をしているにもかかわらず、パーリ聖典の校訂者や翻訳者の大方は、むしろ「ヴィデーハ国の牟尼」を採用していることが指摘されている。この場合、*Mahāvastu* や『仏本行集経』の記述を根拠にしているのかは不明だが、パーリの仏教文献において「ヴィデーハ国の牟尼」という解釈は可能であろうか。以下で、この *Vedehamuni* の *Vedeha* を固有名詞と解することの妥当性について見ていく。ここで、*Vedehamuni* の表記の仕方は *Vedeha* を固有名詞と解釈した場合は先頭の文字を大文字に、普通名詞と解した場合には小文字で始まるという区別を付けておくことにする²²。

vedeha という語句は、アーナンダ以外の人の呼称にも使用されている。しかし、その呼称の由縁は様でなく、例えば母親の出身が *Vedeha* であったから、*Vedehiputta* と呼ばれる

場合²³や、Kosala 国の君主であって Vedeha を含む呼称を持つ場合²⁴もある。

ここで Ajātasattu(阿闍世王) の²⁵Vedehiputta という呼称についての記述を見てみる。

Vedehi-putto ti, ayam Kosala-rañño dhītāya putto, na Videha-rañño. Vedehīti pana paṇḍitādhivacaṇaṃ etaṃ, yath'āha; 'Vedehikā gahapatāni, ayyo Ānando Vedehamunīti. Tatrāyaṃ vacanatto. Vidanti etenāti vedo. Ñāpass'etaṃ adhivacaṇaṃ. Vedena ihati ghaṭati vāyamaṭīti vedehi. Vedehiyā putto ti Vedehi-putto. (*Dighaṭṭhakathā* [以下 DA] I 139) Vedehi-putto(ヴィデーハ妃の息子)とは、彼は Kosala 国王の娘の子であって、ヴィデーハ国王(の娘の子)ではない。“vedehi”とは、また、これは賢者と同義語であり、次のように言われるが如くである。「女性資産家 Vedehikā, vedehamuni なる聖者アーナンダ。」これには、語義がある。これにより知るということから veda である。これは智慧と同義語である。Veda をもって努力する(vedena iha), 努める、勤むと言うので、vedehi である。Vedehi の息子というのが Vedehi-putta である。

ここでは、Vedehiputta の Vedehi について、Kosala 国王の娘であって Videha 国王の娘ではないと解釈している。この一節より、パーリの註釈書にも固有名詞としての Videha の概念が存在していたことは分かる。しかしさらに、*Dighanikāyaṭṭhakathātikā*(以下 DT) I 271) は、Kosala 国王とは Mahākosala 国王²⁶であるとし、Videha(Vedeha)には触れていない。DA のこの Vedehiputta に対する解釈を巡っては諸説述べられていて²⁷、中にはこれをブッダゴーサの誤りであるとする説²⁸もあるが、「Vedeha 族は Magadha 国に征服されるまで…Kosala 君主制国家の支配下にあった」との説²⁹に従えば、註釈書の内容も誤りと断定できない。また、こうした背景を考慮すれば、Kosala-Vedeha という呼称を持つ Kosala 国王の呼称も理解できよう。

何れにせよ、ここで注目されることは、Vedeha をその中に含んでいる呼称に対する註釈において、vedena-īha という解釈が適用されていることである。アーナンダについての記述には、前述したように智慧に関連する記述もあったが、「智慧を以て努力する」ことにより vedeha と呼ばれるのはアーナンダ³⁰のみではなく、vedeha を「賢者」とする註釈はアーナンダ特有のものではないことが分かる。

しかし、先行研究³¹により指摘されてもいるように、パーリ註釈文献では、アーナンダに対する vedehamuni の vedeha を vedena-īha「智慧をもって努力する」と分解し、語義を paṇḍita「賢者」とするのみであって、それ以外の説明は見られない³²。

こうした中、*khuddakapāṭhaṭṭhakathā* (以下 KhpA)³³では vedehamuni を次のように用いている。これは、第一結集の際、「吉祥経」の因縁をマハーカッサパがアーナンダに尋ねた時にアーナンダがそれに答えたという場面で、ここでは比丘尼によってではなく神々によって vedehamuni が用いられている。

…ekaccānaṃ devatānaṃ cittam uppannaṃ: “ayam āyasmā vedehamuni pakatiyāpi sakyakulanvayo bhagavato dāyādo, bhagavatā pi pañcakkhattuṃ etadagge niddiṭṭho.

KhpA(*Paramatthajotikā* I 99).

ある一部の神々に次のような思いが生じた。「この尊者(アーナンダ)は、ヴィデーハ出

自の聖者(vedeha-muni)であり、もともと釈迦族の家系に属し、世尊の相続者であり、(開法することでは)第一人者であると、世尊から五度明示されたのである³⁴。

(及川・村上『仏のことば註(四)』391 参照。下線は論者による。)

このように、ここで用いられている vedehamuni に対して、及川・村上は、「ヴィデーハ出自の聖者」と和訳している。これは、永崎[1991]が指摘した『仏本行集経』³⁵において「毘提耶国から出た仙人」という意味の漢訳と同じである。KhpA では、vedehamuni の直後に「もともと釈迦族の家系に属し(pakatīyāpi sakyakulanvayo)」が続いていることから、ここで用いられている vedehamuni は、「賢者牟尼(paṇḍitamuni)」よりもむしろ「ヴィデーハ出自の聖者」と解する方が自然であり、適切であると判断される。このことから、パーリの文献においても、Vedehamuni を「ヴィデーハ出自の聖者」と解するのは可能であろう。

永崎[1991]が、「王の命令と母親の反対によって(仏教への出家具足が)適えられなかったために(アーナンダは)ヴィデーハに行って沈黙の誓いを立てて座禅瞑想に励んだ。周知の如く、古代インドでは沈黙の誓いを立て、それを厳守して修行している人を『牟尼』と呼称したのであった。…仏教の開祖を釈迦牟尼世尊と呼称する点などからも知られるであろう。」³⁶と記しているように、Vedehamuni を「ヴィデーハ出自の牟尼」と捉えるならば、これは、ゴータマ・ブッダを釈迦族出身の聖者と言う意味で釈迦牟尼(Sakyamuni, śākyamuni)と呼ぶ³⁷ のに、同型の複合語として対応すると言える。

ところで、この神々の心に生じた思いはアーナンダへの讃辞とも言えるものだが、これら一連の表現の第一に来るのが、経典や註釈書に見られた「多聞第一」や「第一人者」ではなく、Vedehamuni であることは何を意味するのだろうか。この直後、神々の思いを知ったアーナンダは、「自分ない徳を想定することを許さず、自分はただ(世尊の)声聞にすぎないことを明らかにしようとする」³⁸と続く。このようなアーナンダの対応から、神々の思いとして述べられている一連の表現が、声聞には過分な内容を含む徳の高いものであることを示唆していると考えられる。その中において先頭に来ている呼称 Vedehamuni の位置づけは注目される³⁹。

V. muni=pacceka buddha から ādiccabandhu へ

Sakyamuni や Vedehamuni に見られる muni 牟尼⁴⁰に関しては、「沈黙」を行とする行者である点で辟支仏(pacceka buddha)との共通性も指摘されている。共に、仏陀以前及び仏陀時代に現れた非バラモンのな修行者、すなわち「沙門」(samana)と呼ばれる者の範疇に組入れられると言われる⁴¹。

ところで、この辟支仏(pacceka buddha)という語は、釈迦族出身の聖者 Sakyamuni たるゴータマ・ブッダに関連しても用いられていて、それはブッダの呼称である ādiccabandhu(太陽の末裔/日種族)⁴²に対する語義解釈や註釈⁴³において述べられている。

ādiccabandhu に関し、釈迦族は日種のクシャトリアヤであるという思想はかなり早くから、恐らくはブッダ出生時の釈迦族自身の間ですでに定着していたであろうと言われている⁴⁴。また、この ādiccabandhu という呼称は、仏教経典において、ブッダにあつては弟子にはな

い呼称の一つであることが指摘されている⁴⁵。前述したように、アーナンダも釈迦族出身であることは広く知られている通りで、その意味で日種族の一員であることになるが、彼に *ādiccabandhu* は適用されないのである。

VI. 固有名詞としての *Vedeha*(*Videha*/*Vaideha*)

Vedhamuni が *Sakyamuni* に、同型の複合語という点から対応する呼称であって、「ヴィデーハ出自の牟尼」と解するならば、*Vedeha* は固有名詞ということになる。この解釈はパーリ註釈文献には見られないものの、*KhpA* における *Vedhamuni* の扱われ方を見たように、パーリ仏教文献においても「ヴィデーハ出自の牟尼」と解するのは妥当であろうと考えられる。そこで、ここでは、*Vedhamuni* の *Vedeha* が固有名詞であることを前提にして、さらに、アーナンダが仏教の出家具足前に *Vedeha* に行き修行に勤励したという *Mahāvastu* や『仏本行集経』の記述を踏まえて、この *Vedeha* が何を意味するのかを検討していく。

広く知られているところでは、*Mithilā* を拠点としていた⁴⁶*Vedeha*⁴⁷は仏教興起時代に、*Vajji*⁴⁸連合国の一部を形成していたということである。*Vedeha* はまた、バラモンが軽視した所で、仏教の文化が育成された所である⁴⁹との指摘もある。*Mishra*[1962]⁵⁰は、*Vedeha* という語が、*Vedeha* 族、*Vedeha* 国、そして *Vaisāli*⁵¹も含む地理的用語としての *Vedeha*⁵²といった三つの意味を持つこと述べている。

パーリ仏教文献における *Vedeha* に関する記述は、*DN II 235*(*Mahāgovinda-sutta*), *MN II 78*(*Makhādeva-sutta*)などに見られ⁵³、ブッダが *Mithilā* をしばしば訪れ、人々を教化した⁵⁴ことが述べられている。しかしとりわけ、*Vedeha* についての具体的な記述をしているのは、*Jātaka*(以下 *J*)⁵⁵にあり、その記述には *Vedeha* 国の様子や *Mithilā* の *Vedeha* 族の種族としての起源が見られるのである。

以下に *J* を中心に *Vedeha* の具体的な内容を見ていく。

(1) *Vedeha* 国や *Vedeha* の人々の様子

Vedeha に関する記述が多く見られる *Mahājanakajātaka* (*JVI46-51*)⁵⁶では、*Vedeha* の *Mithilā* が、富める町で都城として整備され、装飾を施した軍備を整え、法を守護している社会であり、多くの人々の行き交う町であることが述べられている⁵⁷。

Mahājanakajātaka では *Vedeha* 国をいわゆる理想の王国とする表現が続くが、これに関連して *Bhūridattajātaka*⁵⁸は、*Vedeha* のクシャトリアを理想の人としている。

Khṭtiyo ca Videhānaṃ, abhijātā Samuddajā ti. (JVI164)

ヴィデーハの人々の中のクシャトリアが(相応しい)。サムダッジャー(王の娘の名)は高貴な生まれである。

(2) 修行者への供養

Mahājanakajātaka では、国の繁栄を背景に、*Vedeha* 国王が修行者(*paccekabuddhe* 独りでさとり人たち)⁵⁹を受け入れ、彼等に食べ物を供養していたことが述べられている。

tumhākaṃ rājā paccekabuddhe bhojesiti. Āma deva ti. (JVI41)

「汝らの王は修行者たち(*paccekabuddhe* 独りでさとり人たち)に食べ物を供養していたのか。」

「その通りです。王よ。」

これに関連して、*Mahāummaggajātaka*⁶⁰においては、賢人を受け入れることが *Vedeha* にとって利益であることを述べている。

Labhā vata Videhānaṃ yassa me edisā paṇḍitā ghare vasanti vijjite yathā tvam si Mahosadhā .
(JVI459)

ヴィデーハの人々にとって、何たる利益であろう。あなたの如き賢人達が領内に住しているとは、マホーサダ。

これらの記述は、永崎[1991]が提示していた疑問の一つ⁶¹に答えるであろう。パーラーナシーと同様かは不明ではあるが、*Vedeha* は経済的に豊かな町であり、修行者を受け入れていたとする記述から、修行者たちの集まるのに良好な環境であったことが窺える。また、非パラモンの修行者である *paccekabuddha* を受け入れていたことは、*Vedeha* の社会がそれに則した社会であったということも推し量られ、この点は、釈迦族の社会⁶²に似ていると言える。

(3) Sakya 釈迦族との共通点

*Makhādevajātaka*⁶³では、ゴータマ・ブッダの前生である *Makhādeva* 王が登場する。*Makhādeva* は、土田[1985]⁶⁴が指摘するように、*Mahāsammata* と *Iksvāku/Okkāka* とを繋ぐ釈迦族の系譜⁶⁵において見られる王の名である。そして「理法に適った正義の王」と言われた *Makhādeva* 王は、八万四千年ずつ王子として、副王として、大王として統治し、*Nemi* 王へと繋がるのが述べられている。これら一連の諸王の名は *Iksvāku* 王統の一支流とされる *Mithilā* 王家の系譜に見られるものである⁶⁶。

Atite Vedeharatthe Mithilāyaṃ Makhādevo nāma rājā ahoṣi dhammiko dhammarājā.

So caturāsitvassasahassāni kumārakīlaṃ tathā oparajjaṃ tathā mahārajjaṃ katvā digham addhānaṃ khetvā ekadivasaṃ kappakaṃ āmantesi; (J I 137)

昔、ヴィデーハ国のミティラーにマカーデーヴァという王がいて、理法に適った正義の王であった。彼は八万四千年ずつ、王子として振る舞い、或いは副王として統治し、或いは大王として統治して長い年月を過ごした…

kālaṃ katvā Brahma-loke nibbattivā puna tato cuto Mithilāyaṃ yeva Nimi nāma rājā hutvā ossakkamānaṃ attano vaṃsaṃ ghaṭevā (J I 139)

そして死後は、梵天の世界に生まれ、更にそこから生まれ変わって、ミティラーでニミ王となり、衰退していた自分の一族を統合し…

これらの記述と同様に、*Nimijātaka*⁶⁷ においても、釈迦族の系譜に見られる *Mithilā* の *Nimi* 王の名の由来が述べられている⁶⁸。

これらから、*Vedeha* が釈迦族と同じく日種族に属する種族である⁶⁹ことが改めて確認された。ゴータマ・ブッダの因縁話⁷⁰の中において、高貴なシッダッタ王子が托鉢して歩いているのを聞いて知った父王が、世尊の前に立って「我等の伝統は *Mahāsammata*⁷¹の王族の子孫である。そこには食を乞い歩く王族は一人もいない。」と述べている。これは釈迦族が *Mahāsammata* の家系を誇りにしている⁷²と分かる箇所である。

以上のように、Vedehamuni の Vedeḥa を固有名詞と解して、Vedeḥa についての記述を検討したところ、Vedeḥa は繁栄した豊かな国であったこと、修行者を受け入れ供養している国であったことが述べられていた。これらから、Vedeḥa は非バラモンの社会を有し、Sakya と性格の近い国であったと考えられる。また Vedeḥa の王として Mahāsammata 家系に見られる Mahāsammata と Ikṣvāku/Okkāka を繋ぐ王名が数多く述べられていたことから、Vedeḥa が、日種族 Mahāsammata、Ikṣvāku/Okkāka に連なる種族であることが確認される。これは、同じ日種という意味で Vedeḥa が Sakya と同等であることを意味するのではないだろうか。

VII. まとめ

アーナンダに対する呼称 Vedehamuni についてまとめると次のようになるだろう。

まず、アーナンダに対する Vedehamuni を「ヴィデーハ出自の牟尼」とする解釈は、パーリ註釈文献には見られないものの、KhpA における Vedehamuni の扱われ方を改めて検討したところ、この訳の方がむしろ適切であると判断されることから、パーリ仏教文献においても Vedehamuni の Vedeḥa を固有名詞と解釈することは、妥当と考えられる。

次に、Vedehamuni の Vedeḥa を固有名詞と解釈した場合、アーナンダに対する Vedehamuni という呼称には、「牟尼」の意味の上に「Mahāsammata 家系に属する、日種族である Vedeḥa の出身」という意味が込められていたのではないだろうか。即ち、アーナンダに対する呼称 Vedehamuni はゴータマ・ブッダの Sakyamuni と同等と言えるまでの意味を有する呼称であって、ādiccambandhu と同様の意味の込められた極めて高い尊称であったのではないかと考える。言うまでもなく、アーナンダは釈迦族出身であるが、釈迦族と同じ血統である Vedeḥa 種族の Vedeḥa 国で牟尼になった、まさにゴータマ・ブッダが釈迦族の国でそうであったようにという意味合いから、この呼称によりアーナンダの権威を高める効果があったのではないだろうか。

その一方で、アーナンダに対する Vedehamuni の見られる場面には少なからずマハーカッサパの存在が明記されていた。Vedehamuni を Sakyamuni と同等と言えるまでの呼称であるとするならば、アーナンダは比丘尼達により Vedehamuni と呼ばれることで、仏滅後の saṅgha においてブッダの後を継ぐ有力な長老として自他共に認められていたマハーカッサパに対することが出来たことは十分考えられ、アーナンダとマハーカッサパとの関係に言及していた永崎 [1991] の示唆をも裏付けることになるだろう。

このように見てくると、このアーナンダに対する Vedehamuni という呼び名は、呼ばれる側と呼ぶ側との関係のみならず、師であるゴータマ・ブッダと仏弟子アーナンダとの関係、アーナンダとマハーカッサパという仏弟子同士の関係を含有する呼称とも捉えられる。

Vedeḥa 国に関する永崎 [1991] の疑問に対して、Vedeḥa という国は聖地と断言できないまでも、多くの修行者の集まる土地であったと言える。また、Vedeḥa 族と Sakya 族との交流については、パーリ仏教文献および註釈文献において窺い知ることもできたが、日種族同士であり性質の近い社会を有していたと考えられることから、交流は容易であったろう。

こうしたことから、アーナンダが、何故父母からの出家具足の不許可によって Vedeha に行ったのかについては、J における Vedeha に関する記述に手がかりは得られなかったものの、実際史実として出向いたか否かは別にしても、アーナンダの修行の場として Sakya 族と同じ日種である Vedeha 族の国を選定したことは十分考えられる。

〈略号および使用テキスト〉

- AN *Āṅuttaranikāya*, Pali Text Society.
Ap *Apadāna*, Pali Text Society.
Cnd *CullaNiddesa*, ビルマ版. *Chaṭṭha saṅgāyana ti pīṭṭakam Suttantapīṭake Khuddakanikāye Cūlaniddesapāli*, 1961.
DA *Dīghaṭṭhakathā*, Pali Text Society.
DN *Dīghanikāya*, Pali Text Society.
J *Jātaka*, Pali Text Society.
JA *Jātakaṭṭhakathā*, Pali Text Society.
KhpA *Khuddakapāṭaṭṭhakathā (Paramatthajotikā I)*, Pali Text Society.
MA *Majjhimaṭṭhakathā*, Pali Text Society.
MNd *Mahāniddesa*, Pali Text Society.
SN *Samyuttanikāya*, Pali Text Society.
Sn *Suttanipāta*, Pali Text Society.
SnA *Suttanipāṭaṭṭhakathā(Paramatthajotikā II vol I)*, Pali Text Society.
Therg *Theragāthā*, Pali Text Society.
ThiA *Therīgāthāṭṭhakathā*, Pali Text Society.
V *Vinaya*, Pali Text Society.
赤沼 『固有名詞辞典』
南伝 『南伝大蔵経』
Childers *Dictionary of the Pāli Language*, London, 1909.
Vipassana Research Institute Chattha Sangayana CD version 3. 0 を検索に使用

(注記)

- 1 永崎[1991]305-319 (*Dīghaṭṭhakathā I 139*, *Mahāvastu II 176-177*, 大正 3. 919 参照.) 辞書における Vedeha の扱ひも様々である。
- 2 永崎[1991]316. 「アーナンダはストレートに仏教教団にて出家具足したのではなく、ヴィデーハの阿蘭若に入って無語戒を受けて修行に勤励した結果、牟尼なる尊称を得た後に仏教教団にて出家具足した。」これには釈子の子供達は一家族につき一名の割合で出家せよという王の命令がある中、兄弟のデーヴァダッタが先に出家してしまったことや母親の反対により出家具足が適わなかった経緯が示されている。
- 3 永崎[1991]312-313. 漢訳の校訂者や翻訳者も「ヴィデーハ国の牟尼」を採用しているこ

とも挙げている。

4 永崎[1991]317。「何故に彼(アーナンダ)は出家具足の不許可によってヴィデーハ(ヴェーデーハ)国に行ったのだろうか。パーラーナシーなどと同様に聖地として出家修行者の集った処ではなかったろうか。釈迦族とも交流のあった国ではなかったろうか。」

5 永崎[1991]306。「賢者牟尼」「賢き牟尼」に対して、「ヴィデーハ(ヴェーデーハ)国からの牟尼」「ヴィデーハ(ヴェーデーハ)国に属する牟尼」と固有名詞を含めた意味を示している。本論で固有名詞と称する場合は、これに倣う。

6 永崎[1991]306, 317. SN II 216, 219. マハーカッサパがアーナンダを「童子」と呼んで非難したのに対し Thullanandā 比丘尼がアーナンダに対して Vedehamuni を使う場面や、マハーカッサパが三度アーナンダによって促され法話を比丘尼達の前で教示した際、それを面白く思わない Thullatissā 比丘尼により、Vedehamuni なるアーナンダと言われた場面など。

7 南伝 13. 316, 329.

8 比丘尼 saṅgha を成立させたことは有名だが、仏弟子のストゥーパの内、比丘尼たちがアーナンダの塔を供養すること(杉本[1984]290-291)も伝えられている。彼のストゥーパは、中村[1958](272-273)によるとマガダ国の首都王舎城とヴァイシャーリーにあり、玄奘によるとマトゥラーにもあったと言われている。(『大唐西域記』4, 抹菟羅國の條)

9 *Vinaya*(以下 V) II 288.

10 永崎[1991]317。「(アーナンダと) 相対するマハーカッサパに、比丘尼をして(アーナンダのことを) ヴィデーハ国の牟尼と言わさしめたのではなかろうか」()内は論者が補足。

11 *Āṅguttaranikāya*(以下 AN) I 23-26. 塚本[1966] 388.

12 AN I 24-25. ブッダから「比丘達よ、私の多聞なる声聞・比丘達の中で、このアーナンダこそ第一人者なのだ。記憶力あり理解力あり堅固心ある侍者の中で、アーナンダこそが第一人者なのだ。」とも述べられている。この他に Therag. G.1041-1043. *Dighanikāya*(以下 DN) II 52 にも同様の内容が見られる。

13 *Majjhimaṭṭhakathā*(以下 MA) III 27. 片山[1999]405。「釈迦族の王の集まりにおいて、『尊者アーナンダは多聞の中の第一人者であり十分な文言によって優美な法話を語ることが出来る』と良く知られている。」

14 MA II 231. 片山[1998]98。「なぜなら彼(デーヴァダッタ)は純粹のマハーサンマタ(人類最初の王)の伝統にあるオッカーカ家に生まれているから、生まれの善家である。」

15 この血縁関係には諸説ある。

16 「ゴータマ」は、世尊の姓(*gotta*)を説明する。Therag G.1018, 1023.

17 中村[1958]272 など。

18 平川[1991]150.

19 Therag G.1051-1090. SN No.16. 彼はマガダ国の Mahāitthā というバラモン村に生まれたという。マガダ国 Sagala 市の Kosiya 家に属すバラモンの女 Bhaddā-Kapilāni と結婚したが妻と共に出家し、ゴータマ・ブッダの弟子となって八日目に悟ったと言われる。

20 AN I 23-26. *aggam dhūtavādānam*. 平川[1974]116。「(マハーカッサパは)仏滅後の saṅgha で最も有力な長老であり、ブッダの後を継ぐ有力な長老として自他共に認められていた。」

21 パーリ註釈文献では固有名詞としていないため、小文字を用いておく。

22 永崎[1991]310. この語句の最初の文字を大文字にしているか、小文字にしているかで、Vedeha を固有名詞と解釈しているか否かという校訂者の見解が窺えることを指摘している。

23 Raychaudhuri[1953]206-207. 「Magadha 王 Bimbisāra の妃が Vedeha 出身だったため、彼女が Vedehi(Vaidehi)と呼ばれ、その息子である Ajātasattu(Ajātasatru 阿闍世王)は、Vedehiputta と呼ばれる。」

Mishra[1962]2. 「Mahāvira の母は、Videhadattā と呼ばれる。」

24 Raychaudhuri[1953]102,207. 「Kosala 国の君主 Para Ātñāra は, Kosala-Videha と称される。」
宮坂[1998]110. 「ヴィデーハ族はマガダ帝国に征服されるまでは, …(中略)…コーサラ君主制国家の支配下にあった」と指摘する。

25 注 23 参照。

26 中村[1963]268-269. 「Kosala 国では, Mahākosala の次に彼の子 Pasenadi が王位についた。マガダ帝国の建設者は, ビンビスアラ(Binbisāra)王。」Pasenadi が Ajātasattu を甥と呼んでいる記述もある。(JVI151-152)

27 Mishra[1962]139. Tibet 文献と Jaina 文献とが, 仏教徒は異なる見解を述べていることも指摘している。

Raychaudhuri[1953]207. Vedeha が呼称に使われていても, その使用法を考慮すれば, 必ずしもブッダゴーサの説を論破するとは限らないことを指摘している。

28 Mishra[1962]139. Vedehiputta については, Magadha 王 Bimbisāra の妃には kosala 出身の妃もいて, この妃と Ajātasattu(Ajātasattu)の母とをブッダゴーサが混同しているとの見解をとっている。

29 宮坂[1998]110.

30 例えば赤沼『固有名詞辞典』(749)では, Vedehamuni を「阿難の異名。Vedeha は国名なれど, ここではただ賢者の義なり」としている。しかし, アッタカターを見ると, Vedeha を含んだ他の呼称に対しても, Vedeha について賢者を以て語義解釈している。

31 永崎[1991]307.

Raychaudhuri[1953]206-207. ブッダゴーサが Vedehi を Veda-ihā に分解していることを指摘している。この際 Vedeha について, Tibet 文献と Jaina 文献とが, 仏教とは異なる見解を述べていることも指摘している。

Childers 562 ; there is a curious adj. vedeho, vedehako meaning wise.

32 永崎[1991]306-307 に詳しい。例えば SA II 175 など。

この他 vedeha に関する解説はあるが vedeha を Vedeha 国や Vedeha 族のような固有名詞として捉えてはいない。例えば *Saddanīti* II 390 では, 三ヴェーダを vedena iha の vedena に当てている。*Mahāniddeśa* (MNd 92-93, 95)に見られる vedehi は veda の活用形である。因みに vedeha の解説と同様の手法で KhpA 110 ではこの他, 地名の Sāvattihī を sabbam atthi(全てある)と分解している。

しかし一方で, vedehamuni の vedeha を固有名詞に解している場合も複数見られる。パーリ聖典 *Kassapa Samyutta* の邦訳者林五邦氏が「鞞提訶の聖者なる尊者阿難」と訳しているのは本文で紹介したとおり。また, *Mahāvastu* の訳に際し J.J. Jones は 'the sage of Vedeha' (ヴィデーハの賢者)としていることが永崎により指摘されている。

33 *Paramatthajotikā*(以下 Pj)の中に KhpA(Pj I)と *Suttanipāṭṭhakathā*(以下 SnA= Pj II vol. 1. 2)が収められている。森(469-470)に示されているように, DA はブッダゴーサの真作と認められているが, この KhpA(Pj)は, そうではない。

34 この後にも, 「四つの不思議な未曾有の法を具え, 四衆が愛しく, 心よく思う人である。思うに(阿難尊者が)今, 世尊の法の王位の相続者の位を得て, 仏になられた。」と続く。

35 大正 3. 919. 此之仙人是毘提耶国而出。作是語已。為共立名。稱為毘提耶国仙人。

36 永崎[1991]315. ()内は論者が補足した。

37 中村[1958]12-13. この呼称は原始仏教の古い層には稀にしか現れていない。

38 KhpA 99, 及川/村上[1989]392.

39 この位置づけには幾つかの意味が考えられる。例えば, 一連の讃辞の先頭に来ているため, Vedehamuni が, その中でも極めて高德であることを意味するとも考えられる。また, 冒頭でアーナンダの出自を述べているとするならば, この場合は明らかに Vedehamuni の

Vedeha は固有名詞と見なすことが出来るだろう。

40 永崎[1991]315. 同様に宮坂[1998]360-361「muni 文化圏は、非バラモンの文化圏を想定する一資料とするにたる。」一方、中村[1984b]296-297「muni について沈黙を守って修行している聖人を言うとは解するのは、後代に成立した通俗的解釈であるらしい。」という見解を示している。

41 杉本[1984]257-258「牟尼=辟支仏=沙門」, *Jātaka* III 453, VI328.

42 土田[1985]103「釈迦族起源説話が示すように釋尊の出自が日種の刹帝利であることは広く知られている。」

43 *Cūlaniddesa*(CND)270, *Suttanipāta*, 54 偈(Sn.G.54)に対する語義解釈; *Ādiccabandhusa vaco nisammāti ādicco vuccati sūriyo. So gotamo gottena. Paccekasambuddhopi gotamo gottena. So paccekasambuddho sūriyassa gottānātako gottabandhu, tasmā paccekasambuddho ādiccabandhu.* 「《太陽の末裔(ブッダ)のこぼを心がけて》で, *ādicca* とは *sūriya* のことである。彼の姓はゴータマである。辟支仏の姓もまたゴータマである。かの辟支仏は姓による太陽の親戚である。従って、辟支仏は太陽の末裔(日種)である。」中村[1984b](260)は、この CND の記述に対して「ブッダゴータマは、釋尊も独覚の一人であり、ここでは独覚の実践する道を教えている、と解した。」としている。この他、SnA II vol. I 104 には、*ādiccabandhu* という名の辟支仏が登場する。

44 土田[1985]103 その成立が最古層に属すると伝えられている *Pārāyanavagga*(Sn.G. 1128)において言及されていることを根拠の一つとしている。この他 Sn.G.540, 915 にも見られる。中村[1958]21「恐らく仏教の最初期から釋尊は『イクシュヴァーグ王(*Okkāka*-*Ikṣvāku*)の末裔』であると考えられていた。」としている。

45 並川[1991]289-304 ブッダにあって仏弟子にない表現として、この他 *cakkhumant*, *lokanātha*, *sugata*, *appatipuggala* があげられている。並川は、初期仏教經典の偈文において、仏弟子に関する表現はブッダのそれと比較して殆ど変わることがなく、主要な相違点と言えば、仏弟子がゴータマ・ブッダの弟子、相続者と言った教団内における上下、主従関係の中で表現されている、としている。

46 塚本[1966]377, 永崎[1991]316, 杉本[1984]363. しかし *Raychaudhuri*[1953]53 は、*Videha* の首都である *Mithilā* は *Jātaka* や叙事詩には述べられているものの *Veda* 文献には言及されていないことを指摘している。

47 赤沼『固有名詞辞典』783「*Videha* はもと種族の名にして奥義書には *Janaka* 王この国を治めると出ている。」

48 *KhpA*158-165 には *Licchavis*(*Vajji*)の起源が記されている。

49 雲井[1967]11. 同様の見解として平川[1974]19「バラモン教の『中国』をはずれた東方の国土である。」がある。これに対して、中村[1963]82は「バラモン文化の影響を受けていた。」と述べる。

50 *Mishra*[1962]1「*Mahāvira* の誕生の地でもある *Kuṇḍagrāma*(*Vaiśālī* 近く)が、*Videha* に位置し、*Mahāvira* と *Ajātasatru* の母達が、*Videhadattā* や *Vedehī*(*Vaidehi*)と呼ばれているのは、第三の意味である。」3「バラモンやジャイナ教徒の地理的概念に依れば、*Videha* は(中略)*Vaiśālī* と *Kuṇḍagrāma* とを含んでいた。仏教徒の *Videha* 概念はこれとは異っていたようだ。仏教徒は *Vajjratṭha*(*Vrijī-rāshṭra*)と *Videha* を二つの異った地理的国家と考えていた。」

51 *Mishra*[1962]63 伝説によれば、*Ikṣvāku*/ *Okkāka* の子で *Viśāla*(*viśāla*)と名付く王が、天女 *Araṇṇyaśāra* と共に設立した町と言われている。中野[1974]128「ラーマヤナ童子品によれば」として同様の伝承を紹介している。

52 中村[1963]268-269 仏典では *Ajātasattu*(阿闍世王)のことを「*Vedeha*(出身の妃である)女の息子」という意味で *vedehiputta* と呼ぶのに対し、ジャイナ教では *Vaiśālī* 王 *Cetaka* の娘

Cellanā が王子の母親であるという伝承について、中村は「Vaiśālī は Videha の内にあるから、ジャイナ教の方が正しいようである」としている。

⁵³ Videha の Janaka 王は哲人君主として Yājñavalkya と問答するのが『ブリハド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』(Brhad up.2.11, 3.11, 4.11)に見られる。宮坂[1962]107 Janaka 家系は仏典ではジャータカ文献に限って伝承されていることを指摘している。中野[1951]『マヌ法典』10-11,13,17,19,33,37 にも見られる。

⁵⁴ MN II 74.

⁵⁵ Vipassana Reseach Institute Chatta Sangayana CD による検索に基づく。

Gandhāra Jātaka(J III 364-369)において、過去世においてアーナンダは Videha 或いは Videha と呼ばれていることが永崎[1991]313-314 で指摘されている。塚本[1966]207「固有名詞と阿難を同一視するジャータカ数 39 に対して、大迦葉は 18 ジャータカにあらわれるに過ぎないことは、阿難が原始聖典においていかに重要な位置づけを占めているかを説明するに十分であろう。」

⁵⁶ J VI30-68 (No539), 『ジャータカ全集 9』31-67.

⁵⁷ J VI46-51.

Mithilāṃ phītaṃ visālāṃ sabbatopabhaṃ 繁栄し、広大で遍く輝くミティラーを。Mithilāṃ phītaṃ vibhattaṃ bhāgasō mitaṃ 繁栄し、等分に区画されたミティラーを。Bahupākāratoraṇaṃ 多くの城壁・楼閣を持つ(ミティラーを)。nicite dhammarakkhite 財積み、法を守護する(この国)を。sovaṇṇe rathe sannadhe ussitaddhaje dipe atho pi veyyaghe sabbālaṃkārahūsīte 武装して、旗を掲げた黄金の車を、豹や虎の皮で覆われあらゆる装飾を施された。hattharūhā, assarūhā, dhanuggahā, rājaputtā, ariyagaṇā, sattasatā bhariyā, 騎象の者・騎馬の者・射手たち・王子・聖者の群れ・七百人の侍女。

⁵⁸ J VI157-219 (No543), 『ジャータカ全集 9』148-544.

⁵⁹ 『ジャータカ全集 9』43 参照。

⁶⁰ J VI329-478(No546), 『ジャータカ全集 10』1-148.

⁶¹ 注 3 参照。

⁶² 中村[1969]19 「シャカ族はバラモン教の伝統を奉じていなかった。」

⁶³ J I 137-139(No9), 『ジャータカ全集 1』154-157. 同じ物語が MN No83, J No541 にある。

⁶⁴ 土田[1985]108-110, 土田[2002]109. また「Mahāsammata と Ikṣuvāku / Okkāka とを繋ぐ諸王の名を各系譜にわたって吟味すれば、…(中略)…現存諸系譜あるいはそれらの祖型となった系譜の作者が、古傳に見える王名または自ら考え出した王名をさまざまに列ねて Mahāsammata と Ikṣuvāku / Okkāka とを結びつけていったことを窺はしめる。」と指摘している。

⁶⁵ 釋尊の家系は次を参照。中村[1969]30-34, 赤沼『固有名詞辞典』465-466, 添付資料の表第一, 第二。Tsuchida[1991]117.

⁶⁶ 土田[1985]109. 土田[2002]109. 諸系譜が等しく Mithilā に都した八万四千王を Ikṣuvāku / Okkāka の先祖の内に掲げていることが指摘されている。釈迦族の先祖が印度諸国をそのつどとてつもなく長い世数にわたって治めたことは系譜作者の空想の所産であるが、Ikṣuvāku 王統の一支流とされる Mithilā 王家にまつわる言い伝えのようなものをおぼろげながらにせよ踏まえていたとも指摘している。

⁶⁷ J VI95-129(No541), 『ジャータカ全集 9』541-541.

⁶⁸ *Mahājanakajātaka* にも paccekabuddha について、「太陽」「一族」といった語句を用いて表現する箇所も見られ、「太陽の末裔/日種族」を想起させる。(J VI41)「太陽とは、あの太陽そのものではなくて、太陽に等しいとされる (paccekabuddhā) 達が、太陽と言われた。」(J VI

45) 「王は愛欲に執着することなく完全に遠離れた心で、一族に属する (paccekabuddhe) 達を思い出して…」また、*Therīgāthāṭṭhakathā* 69, *Apadāna* II 578 にも *Vedeha*, *narādicca*, *okkāka* の子孫, *gotama*, などの語が続いて、日種族を述べている。「*Videha* という名の多くの宝石を有する豊かな商人がいた。私は彼の妻であった。ある日彼は *narādicca* のもと従者とともにいった。そして悲みと恐怖を取り除くブツダの教義を聞いた。…今から十万劫オッカーカの子孫でゴートラがゴータマである世界における師が生まれるであろう。」

⁶⁹ 宮坂[1998]110 *Vedeha* 族が仏滅後、釋尊の遺物崇拜をしていることは「ミティラーのヴィデーハ族がマハーサンマタ家系に属しサーキヤと同じくオッカーカーを頂くのに起源するものと思われる」と述べる。

⁷⁰ J I 90 (No Santikenidāna).

⁷¹ 『ジャータカ全集 1』413 *Mahāsammata* は人類の最初の王で、釈迦族の先祖と言われている。

⁷² DN I 92-93 に対して、中村[1969]16 は「(ブツダと青年バラモン・アンバッタとの対話において)シャカ族の、バラモンの血統観念に対する公然とした挑戦が見て取れる。」とし、バラモンの血統観念に対して釈迦族が血統に誇りを持っていると述べる。宮坂[1998]46 は「*Okkāka-bandhu* はバラモンを梵天の親族(*brahma-bandhu*)と言うのに対する」と言う。

(参考文献)

Mishra, Y. [1962] *Early History of Vaiśālī*, Delhi.

Raychaudhuri, H. [1953] *Political History of Ancient India*, Calcutta.

Smith, H. [1929] *Saddanīti* II, London.

Tsuchida, R. [1991] *Die Genealogie des Buddha und seiner Vorfahren*, Göttingen.

及川真介/村上真完 [1989] 『仏のことば註(四)』, 東京: 春秋社.

片山一良 [1998] 『中部(マッジマニカーヤ 根本五十経篇 第一期 2)』, 東京: 大蔵出版.

[1999] 『中部(マッジマニカーヤ 中分五十経篇 第一期(3))』, 東京: 大蔵出版.

雲井昭善 [1967] 『仏教興起時代の思想研究』, 京都: 平楽寺.

杉本卓洲 [1984] 『インド仏塔の研究』, 京都: 平楽寺.

塚本啓祥 [1966] 『初期仏教教団史の研究』, 東京: 山喜房佛書林.

土田龍太郎 [1985] 「釈尊族の系譜」『釈尊観』, 京都: 平楽寺, 100-111.

[2003] 「釋尊の名號をめぐって」『ことばと文化』6, 埼玉: 一穂社, 101-121.

永崎亮寛 [1991] 「アーナンダ比丘伝の一側面について」『仏教文化学論集』305(476)-320(461).

中野義照 [1951] 『マヌ法典』, 和歌山: 日本印度学会.

[1974] 『インド法の研究』, 和歌山: 日本印度学会.

中村元 [1958] 『ゴータマ・ブツダ』, 京都: 法蔵館.

[1963] 『インド古代史(上)』, 中村元撰集 5, 東京: 春秋社.

[1969] 『ゴータマ・ブツダ—釋尊の生涯—』, 中村元選集 11, 東京: 春秋社.

[1984a] 『ジャータカ全集』1-10, 東京: 春秋社.

[1984b] 『ブツダのことば』, 東京: 岩波文庫.

- 平川彰 [1974] 『インド仏教史(上)』, 東京: 春秋社.
[1991] 『原始仏教とアビダルマ仏教』, 平川彰著作集 2. 東京: 春秋社.
並川孝義 [1991] 「原始仏教におけるブッダ」『仏教文化学』(492)289-304(477).
宮坂宥勝 [1962] 「種族社会と仏教の起源・序説(二)」『密教文化』61, 20-56.
[1998] 『宮坂宥勝著作集 第一巻仏教の起源』, 京都: 法蔵館.
森祖道 [1984] 『パーリ仏教注釈文献の研究』, 東京: 山喜房.

2004. 1. 7稿
たむら のりこ 東京大学大学院博士課程

Vedehamuni as an Epithet of the Buddha's Disciple Ānanda

TAMURA, Noriko

According to source materials, the term *vedehamuni*, an epithet of Ānanda, has two possible interpretations, “a sage” and “a muni from the region of Vedeha,” and two usages in speech, as a general noun and as a proper noun. This article, focusing on these two points, aims to investigate the original implication of this term as attested in Pāli materials.

First of all, it is obvious, as Nagasaki asserts, that while the interpretation of *vedehamuni* as a sage comes from Pāli commentaries (*aṭṭhakathā*) of the southern tradition, the latter originates in the *Mahāvastu* or the *Fu-ben-han-ji-jing*, although the latter became more popular in translation among contemporary Buddhist authors.

The *Aṭṭhakathās* that comment on the term *vedehamuni*, with the single exception mentioned below, unanimously take it as a general noun meaning “a sage,” as is shown in the examples of Vedehi-putta or Kosala-Vedeha, which indicate a king related to the country Vedeha. Buddhagosa, reducing this term into *veda-īha*, elaborates on this interpretation of the meaning as “a sage.” In this way of understanding the term, *vedeha*, used as a general noun, is not necessarily confined to the epithet of Ānanda.

Despite this predominant interpretation in the Pāli commentaries, however, one account in the *Khuddakapāṭhaṭṭhakathā*, in which the term *vedehamuni* is of primary importance as an epithet of Ānanda, makes us highly dubious of the assumption that this could have been the original. Since the term *vedehamuni* at this point, which has the connotation that Ānanda had been an ascetic in Vedeha before becoming one of the Buddha's disciples, is in sharp contrast with the passage that immediately follows, “he is originally a man of Sakya descent.” This term needs to be translated as “a muni from Vedeha,” like the use of Sakyamuni, meaning a muni from the Sakya clan. This interpretation is in complete consonance with that of the northern tradition. In addition, given that the word *muni* is syntactically in close relation with the term *paccekabuddha*, which often correlates with *ādiccābandhu*, an epithet exclusively addressing the Buddha, the epithet of *vedehamuni* may well be regarded as indicating nothing other than Ānanda.

According to several accounts in *Jātaka* and four *Nikāyas*, the country of Vedeha, composed of the Vajji with several tribes, shared their lineage with the family of the Mahāsammata and Sakya, whose kings are reported to have given full treatment to various *paccekabuddhas*, two of whom were the Buddha and Ānanda. In these circumstances, it would be surprising that the title *vedehamuni* was dedicated exclusively to Ānanda, one of the closest disciples of the Buddha.